

---

**\*\* トナカイひろいました \*\***

汐井サラサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

\*\*\* トナカイひろいました \*\*\*

### 【Nコード】

N0348Z

### 【作者名】

汐井サラサ

### 【あらすじ】

（短編投稿可能な長さではありませんが、閲覧する際のことを考慮して連載形式にさせていただきました。一度に全話更新。一応読み切りとなっています^^）

クリスマス直前の忘年会の帰り。私、園枝凜夏 社会人二年目、彼氏なし。自由気ままな一人暮らし は、拾ってしまったトナカイを……。

ちよっぴり笑えて、ちよっぴり苦くて、ちよっぴり甘い。

そんなクリスマスのお話です。 女性向けです

## 第一話

季節柄仕方ないと諦めている。

「……行き倒れ」

「誰が行き倒れだ、こら」

喋った。

その上、持ち帰ってしまった。否、違う。断じて違う。絡まれたのだ。確実に。この変質者としかしいようのない……見るからに怪しい、トナカイに。

……

私は少しアルコールの入った身体の火照りを醒ますように、師走末の冷たい風を切って歩いていた。

クリスマスを間近に控えた忘年会とか最悪だ。

どういう流れか普通に飲んでいただけなのに、嫌いなタイプの男性社員に絡まれて、ポッキーゲーム紛いなことを強要された。あの顔が鼻息が掛かるくらいまで、正面に来たことを思い出すと腹立たしいというのを通り越しておぞましい。

そんなわけで、お酒が進んでしまった。

タクシーを断って歩いていると、リア充カップルが目について仕方ない。三步進んだ私に迷惑の掛からないところで爆発しろ。そうリアルに思ってしまうくらい憎らしい。羨ましいわけじゃない。羨ましいわけではっ。

というか数日前まで私だってあの中の一人だった。あのクソ男が、馬鹿なことさえしなければっ！

『あー、ごめん。この間のコンパで意気投合しちゃったなっちゃん  
と、やつちゃった』

「は？」

『そしたらさー、お前より相性が良いっていうか、凄くて。もうこ  
れ別れるしかないよな？』

分かるだろ？ って、わっかんねーよっ！！

思い出しイラつきに、がんと足元に転がっていた石を蹴った。  
蹴ったら偶然ぶち当たってしまったのだ。路上の隅に野たれ死んで  
いたトナカイコスプレの雄に。しかもこめかみ。だからら出血しち  
やって良い迷惑だ。

放って帰るわけにいかなくなってしまった。

……  
そして今に至るわけだ。

「傷の手当てまだ？」

「今からやる。消毒液ないから、アルコールぶっ掛けて良い？」

因みに焼酎だけど。駄目なら調理酒もある。

「はあ？！ お前何いつちゃってんの？ 良いわけないだろー」

「……だつてないんだもん」

「それならそれで、舐めようか？ とか可愛らしい仕草くらい出来  
ないのかよ、いきなり、アルコールぶっ掛けるってどこのおっさん  
だよ」

このポケットナカイが……傷口舐める馬鹿がどこにいる。大体それ  
を可愛いだなどという、男が居るから……。ああ駄目だ全身全霊を  
掛けて、今現在男性不審というか……生物学上雄というだけで毛嫌

い出来る。ちつと口内で舌打ちしてから、にっこり作り笑顔。

「舐めようか？」

「俺に媚びようっていうには年取りすぎだ」

……こいつ葬って良いですか？

……がしっ。がらがらがら、ぴしゃんっ！

首根っこ引つつかんで、ベランダに放り出してみた。一瞬何をされたのか良く分からなかったのが、トナカイの動きは止まっていたが外気に触れて頭が冴えたのだらう。角の横に愛らしくある小さな耳がびるると震えた。そして、無言ですっくと立ち上がると……

どんどんどんっ！

と派手に窓を叩きやがる。

「開けるっ！ この馬鹿野郎っ！ いや、鬼女っ！ こんないたいけなトナカイを寒空の下に放り出すとはどういう了見だこらーっ！ さっさと開けるっ！ りんりんっ！」

……がらっ！

「りんりんいうなっ！」

バキッと殴り倒した。

これ以上騒がれても近所迷惑だから一応室内に入れてやる。私の酔いはすっかり醒めた。

「ていうか、なんで私のことを、い・た・い・け・な・トナカイが、りんりんなんて呼ぶの？」

「そのえだりんか園枝凜夏だろ、書いてあるんだからそのくらい俺でも分かる」

書いてある？ どこにだ。私は名前入りの何かを持ち歩いている覚えはない。

「……あえて突っ込まないわ。あんたの名前は何？」  
「りんりん。寒い。あつたかいもの飲ませろ」

私が問質そうとした先には誰も居なかった。さつさと部屋の中央にあるコタツにすっぽりと納まって、トナカイは蹄でコツコツ台を叩く。蹄で。蹄。着ぐるみだよな？

「ご立派に天井を指している角を、がっつと掴んで、

「ちょっと角邪魔」

「ごんつとコタツの台に頭を沈めた。そして、台に突っ伏したトナカイの後ろを通り過ぎると、一応、私が加害者（現在進行形）らしいから、ココアとか淹れてやった。

「はい。どうぞ」

「ことりとコタツに置き、自分の分も入れたからそれを両手に包み込んで、私もコタツに入る。ああ、コタツは平和だなあ。ずずつ。ココアも甘くて美味しいし。」

「りんりん」

「だから、勝手にりんりんいうな」

「お前これ見て何も思わないの？」

「は？」

再びトナカイはコツコツと台を叩く。うるさいな。

「は？ じゃなくてな、飲めないだろっ！ これじゃっ！」

「あんたが着ぐるみ脱いだら良いだけでしょっ！」

「はあ？ 何いっちゃってんのりんりんちゃん。俺トナカイなの。

サンタクロースの婆に日々こき使われる可哀想なトナカイなの。着脱できるわけねーだろーがっ！ この馬鹿」

お爺さんではないのか？ どっかのお店のイベントだろうか？

大人向けならきつとサンタのおじいさんよりはお姉さんの方が受けが良くて当たり前だ。にしてもなんでこんなにこのトナカイは偉そうなんだ。人の家に入りこんだ上に、勝手に寛いで……勝手にコタツつけて勝手にエアコンのスイッチまでオンしたのはこの男だ。

ああ、そうか、押すには不便しないのか。

## 第二話

……ずぼっ

「はい、どうぞ」

私は苛々しつつも、一度台所に戻りトナカイのカップにストローを突っ込んで再び座った。

「つて、お前」

「何」

「これで良いと思ってんのかよ！」

「……口は良く回るんだから、使えるでしょ」

「熱いだろ！ 俺はデリケートなトナカイなんだよ。猫舌なんだよっ！ ストローなんかで飲めるかっ！」

トナカイならトナカイ舌だろう。

うるさいやつだ。

仕方なくもう一度立ち上がって台所を往復する。このクソ寒いのでどうしてこんなトナカイのわがままに付き合わなくてはいけないんだ。

「……何する気だ」

危険を察したのか、トナカイは器用にコップを私の手元から反らした。

「氷入れるんだよ。冷えれば問題ないでしょう？」



「お前馬鹿だろっ！ 馬鹿だよなっ！ 俺はあつたかいもんが飲みたいっていったんだぞっ！ それをアイスココアにしてどうするんだよっ！」

トナカイは鼻だけでなく、頬まで赤くして怒っている。

鼻。

塗っているのかな？ 赤いな。

仕事とはいえ、お気の毒だ。それがなければ、それなりに見れない顔ではないだろう。黒に近い緑色の瞳は特に綺麗だと思う。

トナカイコスしているけれども。

「手、冷たいから早くカップ出しなさいよ」

「嫌だ、ふーふーしろ」

お前がしろよ。いつては駄目か？ いったら駄目なのかつ！

とりあえず、氷をシンクに放りに戻って、もう一度トナカイの傍によるとカップを抜き取った。蹄で支えているだけだからあっさり抜ける。片手にカップ。空いた手で……。

……がらがら、どんっ！ ぴしゃんっ。

「外なら直ぐに冷えるわよ」

ヤツの首根っこを掴み、もう一度放り出した。

二度目だというのに、刹那きよとんとするところがちょっと可愛い。……可愛い？ いや、それはトナカイコスの間抜けさからだ。

ちよこんと上向きな尻尾が、ぴくんつと空を指して可愛いとか思わない……というか、尻尾まで動くとはかなりリアルだ。

どこのお店の人だろう。

どっかりと胡坐をかいて座り、器用にマグカップを持ち上げて啜っている。ほわりほわりと上がる湯気が……なんというか哀愁を漂わせる。ちよつと可哀想になる。

がらがらつと窓を開けると、こちらを見上げたトナカイに、ふんつと空になったマグカップを差し出された。反射的に受け取れば「さみい」と何事もなかったように入ってくる。

「……寛いどころ悪いけど、帰ってもらえませんか？」

「嫌」

「は？」

「帰りたくない泊めて。ああ、石がクリーンヒットしたところが痛い、駄目だこれ、帰るの無理、絶対無理」

もぞもぞとコタツの中へと沈んでいく。

「……トナカイさん。お話があります。ちよつと座りなさい」

ペシペシと、私もコタツに座って台を叩く。

私の台詞に肩まで潜り込んでいた大きな身体をずると出してきた。どこまで人ん家で寛ぐ気なんだ。

「石を当てたのは悪かったと思っています。すみませんでした。でも、もう乾いてるでしょう？ かすり傷じゃない。手当てだってあんたが勝手に拒んだんだから、私にはそれ以上出来ることはないし、私は明日も仕事で、さっさとお風呂に入って寝たいの。帰ってください」

びしりと玄関を指差した。トナカイは人の話を聞きながら……こともあるつか

「寝るなっ!」

「ごんっ! ご立派な角を引つつかんで台に叩きつけた。

「~~~~っ、痛え」

舟を漕いでいるお前が悪い。

「帰れ」

「だから、嫌だつて。俺此処に泊まることにしたの。風呂なら入つて来いよ。一緒に入りたいなら付き合つても良いけど」

机に突っ伏したままこちらを向いてにやりと笑う。コタツと仲良くなったせいで額が赤いし鼻も赤い。間抜けとしかいいようはない。

「大丈夫だつて、セックスがヘタすぎて男に捨てられるような女襲わねーよ」

……なんですと？

びしっ。

「あなた、あの男の知り合いなの?」

自分でも驚くほどの低音が出た。

「あの男ってなっちゃんとかラブラブのヤツ?」

ひくりと頬が引きつる。

「知り合いじゃねーよ。全然」

「じゃあ、なんでそんな詳細まで知ってるのよ」

「そりゃあんたに書いてあるからだろ」

「……どこにも書いてないわよ。書くわけない」

私はブログをやっているわけでもないし、SNSで日常を赤裸々に綴っているほどの暇人じゃない。あいつがそれをしていたかどうかは知らないけど……そうか、あの馬鹿、あることないことそういうところに書き綴っていて、このトナカイはその読者だったのかもしれない。

「違うって」

「何が!」

「べっつにー、なんなら俺が教えてやろうか?」

「……は?」

何を誰が教えるって? 私の思考はあいつへの苛々で追いつかない。

「だーからー、セックスに決まってんじゃん」

決まってねーよ。

この脳内常春のトナカイ、誰か滅してくれ。  
爆発しろ。  
塵と化せ。

ゆらりと立ち上がった私は、そのまま足を上げてポケットナカイの頭を踏みつけた。

ぐりぐりぐりぐり……

「い、て、い、たたたた……つちよ、ど、動物、虐、待……」

「黙れ変態。黙れコスプレ男」

「ギブっ！ ギブギブッ！ ギブアップです。りんりん許してっ」

分かれが良い。

私が足の力を緩めたと同時に、痛みにぎゅーっと閉じていた目を開けると

「すげー、眺め」

がんっ！ ぐりぐりぐりぐり……学習能力ゼロのトナカイに繰り返した。

それから、りんりんいうな。なんか凄い陽気そうな響きだ。私には似合わない。

よいしょとトナカイの頭から足を降ろしたら、トナカイは、はふーっと深く嘆息した。

まあ、加減なしでやったから痛かっただろう。自業自得だ私は謝らない。

「素で居れば良かったんじゃないの？」

「は？」

「暴力女だけど、大人しくて可愛くて良い子を作ってるより、マシじゃね？」

起き上がって「角折れてねーよな」と角の確認をしつつそういったトナカイに返す言葉もなく、ぽすんっと私は座り込んだ。

「……………にが、」

「は？」

「あんたに、何が分かるのよ！」

ずっと、ずっと好きだったんだ。

彼に見て欲しくてダイエットも頑張ったし、化粧だって綺麗に出来るように勉強した。ファッション雑誌だって沢山愛読して、おしやれの勉強もして……………愛されたくて、愛されるように、ずっと頑張った、私なりに努力してきた。私は頑張ったのにつ！ 頑張ったのにつ！ 結局あんな理由で捨てられた。

### 第三話

……コツ。コツコツ。

「……痛いんですけど」

「へ？ いや、泣かれると面倒くさいし、俺が泣かしたみたいじゃね？ だから、撫で撫で、りんりん良い子良い子と……」

そうか、これは小突かれていたのではなくて撫でられていたのか。

頭の上に乗ったトナカイの前足を、ぺっと払った。

撫でるなら撫でるで、着ぐるみくらい脱ぎなさいよね。と、いう気にもならない。

私はがっくりと肩を落としたまま「お風呂はいつてくる」とトナカイを追い返すことを諦めて、シャワーを浴びることにした。もう、随分酔いも覚めたし。大丈夫。

明日はクリスマスイブだというのに、私は変な拾いものをしてしまった。

今夜は終電も終わっただろうし、どこに住んでるんだか知らないけど……朝一で追い出せば良いか。

わしわしと髪を拭きながら部屋に戻れば、トナカイはコタツで丸くなって寝てしまっていた。

ぺたんつとその傍に腰を降ろし、毒づいていた偉そうなときは違い、可愛らしく 間抜けというほうが正解かもしれないけどくびぴつと眠っているトナカイを眺める。

着ぐるみ蒸れたりしないのかな？

なんか変な汗かいて湿疹とか出来そうな気がするんだけど。

そおっと撫でてみる。

う、わぁ……良く出来てるな。本物みたいだ。固くてごっごっした短毛。これどうやって着てるんだろ？ 皮膚もつにんつにんつてなるんですけど。リアルすぎる。ぶくく……。

ふはーっ！ 手のひらにくすぐったいっ！ え？ なんか気付いたのかな？

耳が動いた。

ぴるるって……何払ってんのっ！ ちょ、可愛い。角も綿とか詰まってる感じじゃないな……。

「……っう、鞭は、やめ、ろ……って」

唸って寝返りとか打つからびくっとなったけど。寝言が怪しすぎるんですけど。どんなお店にお勤めの方ですか？ あまり親しくなりたくないタイプだな。

うん。

きつとそうに違いない。

「あ」

転がっている向きが変わったから、丁度こめかみの傷が目に入った。

かすり傷だ。

すりむいた程度。数日で治ると思う。



酔ってたから、そのくらい！ って強気に出たけど、実はビビりだから、相当ドキドキした。傷害罪とかで訴えられたらどうしようかと思った。そんな心配要らなさそうで良かった。にしてもなんであんなところに捨てられてたんだろっ。休んでいたという場所じゃない。

「絆創膏……」

そうだ。

そのくらいなら、と、ふと思いついて、身体をベッドサイドの方へ向け小さな棚へと手を伸ばす。

「…………… あったあった。キティちゃんだけど、まあ、良いよね。」

嫌なら直ぐ剥ぐだろうし。

私は目的のものを発見して元の位置に戻り、再度じーっと眺める。そつと腰を折って、前に流れてくる邪魔な髪を耳に掛け後ろへと流す。

「……………」

ちゅっ。

軽く傷口に唇を寄せた。ほんの少しだけ血の味がして苦味が口内に残る。少しだけ早くなる鼓動と高くなる体温が心地良い。

「じゅめんね」

小さな小さな声で謝った。ちゃんと悪いと思っています。

ぺた……つと。ぷつ。トナカイにキティちゃん。かなり異色カッ  
プリングだ。

可愛い可愛い。よしよしと一人頷いた。

……

「どうしたの？ 凜夏。今朝は若干ぼろくなってない？ あ、ああ、  
昨日のシヨック引きずってる？」

事務所に入る早々同僚にそう声を掛けられた。昨日？ 昨日のシ  
ヨックってなんだ。昨夜の最大の誤算は、トナカイを拾ったことく  
らいだ。

「確かに、あの顔があそこまでくるときついよねー」

「え？ あ、ああ！ そ、そうだよね」

はは。同僚には悪いけど忘れていた。

今朝目を覚ましたら、目の前にトナカイの顔があったのだ。

もちろん、一緒に寝た覚えはない。コタツで爆睡していたから、  
ブランケットを突っ込んで寝冷えしないように一応気を使ってやっ  
たつもりだ。手当てだって一応した。

それなのに、いつの間にかベッドに潜り込んでやがった。

あの獣。

トナカイだから獣か、いや、着ぐるみ脱げよ。

寧ろそれで助かったのか。蹄ではなにも出来ないだろう。うん。  
と、納得して落ち着こうとしたのに「口があれば大抵のことは出来る」とのたまった。

死ねば良い。

とりあえず、両足で腹部を蹴り倒しベッドから落としたが、それだけでは気がすまないっ。

一人暮らしの女の子の部屋でそんな暴挙を犯すとは！ 私もお酒が残っていたとはいえ……成人男性がいるのに爆睡するなんてしじった。

私の苛々を悟ったのか、彼女はそれ以上突っ込むことはしないで「元気出せ」とぼんぼん肩を叩いて、自分の席に戻った。

ロッカーに荷物を置きにいった、鏡を見たら確かにやつれているというか、髪が綺麗に整ってない。ぶすつとしたまま私はロッカーにおいてある、スプレーを使って一通り直していく。

昨日だって祭日だ。

今日なんて土曜日だ。なぜ私は仕事してるし……。

振られたショックから、あっさりと休日出勤を変わってしまったのだ。私の馬鹿。仕事してれば虚しさを少しは忘れるかと思っただけ、余計に虚しくなってくる気がした。

## 第四話

RRR……RRR……RR……

さて、事務所に戻ろうと思ったら、ケータイが鳴った。切るの忘れてた。バッグからケータイを取り出せば、メールだ。

「う」

タイトル見ればあいつだ。

今更なんだというんだろう。新しい彼女自慢だったらどうしよう。面倒臭すぎる上に、やりきれない。

『今夜暇？ 一緒にすごそう？ ケーキ買って行くからさ』

どういう了見だ。

物凄く困惑した。困惑して、どきどきして、どうして良いか一瞬にして頭の中がパニックになった。

なっちゃんとかやらとはどうなったんだろう？ でも、でもでもでも、元カレと、仲良くイブを過ごすなんて無理だよ。

大きく深呼吸して、勇気を出し、ぱたんっとかケータイを閉じた。

ポケットに滑り込ませたのは私の弱さだ。

バッグに仕舞いこんで、もう相手にしないということが出来ない。あっさり切り捨てることが出来ない。

何て返信すれば良いか分からないとか考えてる。

分からないということは迷っているということだ。

私は迷っている。

『やっぱり、凜夏が一番だよ。気付けなかった俺を許して』

昼時にメールがまた入った。

胸がきゅつと痛くなつた。それは私のことが好きだということだよね？ 私とまたやり直したいということだよね？ 私が好きだつていつてくれるんだよね？

別れ話をされたとき、あれだけ最低だと心の中で罵って、悪態付いて傷付いたのに、どきどきしてしまっている自分が情けない。

でも、そっか、なっちゃんには捨てられたんだな。ぼんやりとそんなことを考える。

……セックスがヘタすぎて捨てられるような女。

むかつ！ なぜか突然トナカイの台詞を思い出した。べ、別にHだけが付き合っている上での価値じゃない。現にそれに気が付いたから彼は私のところに戻ってくれらるって……。

……素で居れば良いんじゃないの？

素の自分を受け入れてもらえるか不安で、ずっと猫を被り続けて結局捨てられたのに、私はそんな人を許すの？ そして、また猫を被り続けるの？

また、私は返信が出来なかった。

十八時過ぎに会社を出ると、またメールが入った。

『プレゼントもちゃんと用意したから。』「ご飯食べに行こうか』

……どうせ、使いまわしだ。

別れた女にそんなもの用意してあったはずない。きつとなつちやんとやらに持っていく予定のものだったに違いない。

そんなもの、欲しくない。

はあ、と嘆息してケータイを閉じ、今度はバッグの中に仕舞いこんだ。

「酷いな、返事くれても良いのに」

「え」

聞き馴染んだ声に顔をあげれば、歩み寄ってくる人影が。遊歩道を飾っているイルミネーションで視界を確保して見えてくる姿は忘れるはずもない。

「あ、あー、酷いのは俺、か。ごめんね？」

にこり。

不本意ながら心臓が跳ねた。

ふわふわと頬が熱を持つ。

嫌だ、まだ好きだといっているみたいだ。身体が勝手に反応してしまう。

「ついてないよな、二人ともこんな日に仕事なんて」

いって笑った彼もスーツ姿だった。

「ねえ、なんとかいって。許してくれるよね？ ちよつとした気の迷いというか、」

「……その気の迷いは、もう二度と起きないの？ 電話一本で、別れ話をして、メール一つでよりを戻そうって……もう、二度とないの？」

寒さじゃなくて唇が震える。声を出す音が揺れる。

嬉しいとか、良かったとかそういう安堵ではなくて視界が緩む。

「ないない！ 絶対ない。凜夏みたいに女の子らしくて、優しい子、居ないって」

で、都合の良い女だろ？ 頭のどこかでそんな台詞が思い浮かんだ。

悔しい。

こいつ、絶対に繰り返す気だ。誠意が薄すぎる。悪びれるという空気が足りない。

「私、そんなに良い子じゃないわ」

「えー、そんなことないって、なっちゃんみたいにながつがつしてるわけじゃないし」

うだらうだらと話しているのは分かるけど、彼が言葉を重ねれば重ねるほど……私の腸は煮えくり返る。沸々とした怒りが湧いてきた。一瞬でもどきどきが戻ったとか、嬉しいとかそんなことを思った自分が恥ずかしい。

「いー加減にしてっ！」

……ゴスッ！

気が付いたら殴っていた。

平手とか可愛いもんじゃない。グーパンチだ。愛も勇気も持ち合わせていない分アンパンチより確実に強いだろう。

喋ってる途中だったから、彼も意表を突かれたのか「ぶっ！」ってなった。

「馬鹿にするのもいい加減にしてっ！ あんたは私の何も知らないっ！ 私の何も、どれだけ、私が頑張ってる……」

頑張ってる園枝凜夏という偶像を作っていたか、気がつきもしないで……その上、必死に作り上げてきた私を馬鹿にして踏み躪ってっ！ もう一度何かいいそうだったから、反射的に殴ってしまった。

「っ！」

それとほぼ同時にちりつと鋭い痛みが頬に走り身体がグラついた。自分が殴り返されたのだと気が付くのには時間がかかり、気が付いたら、じわりと堪えきれない涙が溢れた。自分から殴っておいてなんだけど……痛い。

口の中が切れて血液特有の鉄分の味がする。

「人が下手に出てりゃ、ぼこぼこ殴ってんじゃねーよ、ブス」

お互いに本心が出た。

……もう、疲れたよ。

形だけの恋人ゴッコなんてこりこりだ。

私はバッグをぐっと握り締めて、力の限り振りぬいて、彼を殴っ



たあと、やり返される前に逃げ出した。

## 第五話

はあはあ……。

ぐつと家のドアノブを握ったときには完全に息が上がっていた。パンプスで走ったものだから、靴擦れが出来た。ずくずくと鈍く痛む。

がっくりと頂垂れつつ鍵を開けて部屋に入ると

「……居るし」

トナカイがコタツで伸びていた。

「あんた、何やってんの？ 今日が書き入れ時じゃないの？」

やれやれと零しながら部屋に入れば、うーっと唸ってこちらを向き「腹減って死にそー」とぼやく。

「朝飯くらい用意していけよ」

「朝そんな状態だったかどうかトナカイ頭では覚えてられないみたいね」

「……腹減った」

私の嫌味もスルーみたいだ。

「ていうか、あんた朝から何も食べてないの？」

「当たり前だろ……俺トナカイだぜ？」

……着替えがないにしても部屋に一人で居るんだから、どんなポ

リシーがあるのが知らないが脱いで勝手に家の中のもの漁っておけば良いのに。

そんなことを躊躇するタイプには見えなかった。

「馬鹿だな……何も買ってこなかったから何も無いよ……あるもので、何か作るうか？」

確かスパゲティがあった。

ソースはレトルトの混ぜるだけのやつがあったと思う。基本、美容のために自炊するけど、それすら億劫なときの非常食だ。

「そーしろよー、腹減ったよー。なんか食わせろー」

子どもみたいに腹減ったを繰り返すトナカイに怒る気力が失せた。というか、そんな体力も残ってない。

私は着替えることもしないで、台所に置いてある小さなダイニングテーブルの上にバッグを置いて、水を張った鍋を火にかけた。

かぼつと蓋をして、上の棚から買い置きしていたスパゲティを取り出す。

「ねえ、どのくらい食べ、る？」

しっかりと閉まったジップロックをあけながら振り返ったら、トナカイが直ぐ傍まで来ていた。びくりと肩が跳ねてしまった。なんか怖い顔をしている。

「何？」

身体を強張らせてしまったビビりを隠すように、眉間に皺を寄せ、問い掛ければ、ぽくつと蹄が頬に当たった。ひやりとして固い。



「創り出すためだ」

「え？」

「女の手は創り出すためにあるんだ。食い物だったり、織物だったり、ありとあらゆるものを創り出す。生きるために必要とされ愛されるべきものだ」

あまりにもトナカイの態度が真摯だから、笑う気にもなれなかった。

「そんな壊すことを知らない手を上げられた程度で、殴り返す男は最悪だ」

「そう、かな。そうかも、ね……」

確かにトナカイは夕べ私があれだけやっても一切やり返すことはしなかった。

まあ、やられて当然のことをしているという自覚が合ったからだと思うけど……。

「当たり前だ。男の手は、守るためにあるんだ。大切なものを守り、慈しむためにあるのに、その対象物を壊そうというのは、間違っている。頬、腫れてるじゃないか」

「ふふ、不細工に磨きが掛かって丁度良いよ」

嘲笑的な笑いがこみ上げてきて、それと同時に泣けてきた。

私、ずっと沢山頑張ってるつもりだったのに、彼の中ではずっと”不細工”だったのかもしれない。それまで何度もいつてもらったはずの、可愛いとか綺麗だとかそんな褒め言葉も全てチャラにするだけの威力があった。

溢れてしまった涙を飲み込むように、きゅっと唇を噛み締めると、傷口が開いてまたじんわりと口内に血液特有の苦味のある味が広がった。

「そんなヤツのせいで泣くな」

つっと気遣わしげに蹄が頬に触れる。

くすぐったくて、これじゃ、守るのも無理なんじゃないかと思うと、なんとなく微笑ましくて口の端が緩んだ。

そのお陰で少し引つ込んだ涙のお礼をいおうと顔をあげたら、目の前にトナカイの顔があった。

「……………っん！、ちよっ！」

意図せず重ねられた唇に驚いて突き放そうとしたら、尚強く唇を押し付けられる。

嫌だと、駄目だと怒って良い局面だと思う。そう思うのに、唇の上を舌先が這い、傷口をちろりと舐めると、ちりつと走る刺すような痛みにきゅっと瞳を閉じてされるままになってしまった。

押し返されないと確信したのか、押し付ける力が緩んで、角度を変えトナカイは私の唇を丁寧に舐める。

僅かな痛みと、暖かさと、くすぐったさと、どきどきで頭の中が真っ白になる。

「ふ……………っ、ん……………」

カタカタカタっ！

「「っ！」「」

思わずそのキスに答えそうになったところで、火に掛けっぱなしだった鍋の蓋が暴れだし、派手な音を立てた。

「っ、あ……い、痛かったよ、な……悪い……」

「え、あ。う、ううん」

かちりと後ろ手に火を止めてお互いに顔を見ることなく、ぎこちない言葉を交わし、私は当初の作業に戻って、トナカイは、大好きになってしまったらしいコタツに戻った。

溢れてしまった分を継ぎ足して、もう一度沸かし、塩を入れて一応二束茹でた。

駄目だな、私、何を血迷っているんだろう。

確かに今日はクリスマススイブで恋人たちの憩いの日って感じだけど、いくらなんでも節操なさ過ぎるだろう。

しかも相手はトナカイだ。

……トナカイ？

本当になぜあいつは着ぐるみ、せめて頭くらい外さないんだろう。首を傾げても答えは落ちてないから、もう細かいことを気にするのはやめた。

## 第六話

「……………あ」

どきどきを落ち着けようと、こっそり深呼吸を繰り返しているときに突然声を上げるから、またびくりと過剰反応をしてしまった。「何？」とゆっくり振り返れば、トナカイはほっぺとコタツが仲良くなったままだけど、目が合って直ぐに逸らされる。

「いや、なんでもない」

見ている間に、ふわわつとトナカイの頬が赤い鼻とお揃いになった。

メイクも取れないんですね。どこの化粧品をお使いですか？

なんでもないというのに、まだ何かあるのか、唸っている。

なんだろう？ 変なヤツだ。いや、見た目的にも最初から変だけどね？

「……………だから、その」

「何？」

「……………さんきゅ」

「だ、だから！ その、絆創膏だよっ！」

吐き捨てるようにそう言って、ぶいっとなつぽを向いてしまう。

どこか子どもっぽいその姿にぶっと吹き出してしまう。なんだ可愛いところがあるじゃないか。



そのデコに貼ってあるのは、キティちゃんだけだね！

「ミートソースと、たらこソースがあるけど、どっちが良い？」

「どっちでも良い」

生死を彷徨っているのか、でろーんと机に突っ伏したまま動きもしない。耳だけが、ぴくんぴくんと小さく動いている。

……リアルだ。

気にしてはいけない。

ケーキでも買って帰れば良かった。小さく嘆息したあと、ミートソースに決める。

「はい、どーぞ」

でんとコタツの上に載せたら、トナカイが若干引いていた。

私も作りすぎたと思う。

本当なら私の分も込みだから大した量じゃないんだけど、どうにも食欲が湧かなかったから、一枚の大皿に全部載せた。確かにいい加減にもほどがあると自覚している。

「見た目は豪快すぎるけど、大丈夫！ 人気のお店のやつだから、味は保証するよ」

ずいっとトナカイのほうへと押し出せば、眉を寄せられた。

そんなに嫌な顔をすることないだろうに、作らせておきながら失礼だ。と、同じように眉間に皺がよる。

「お前さ、学習しろよ」

「は？」

「これでどうやってフォーク持つんだよ」

こつこつと蹄で台の上を叩く。

「……犬食い？」

「俺はトナカイだ」

細かいことはどうでも良いと思う。

「熱いだろ！ 火傷するだろ！ せめて、ふーふーしてあーんってしろよ」

それは個人的に最上級の対応に感じるのですが、トナカイの中では最低限のラインらしい。

思わずご立派な角を掴んでそのままスパゲティー皿に顔を埋めた気分になった。

そして、それを実行してやろうかと思っただころで

ぐう、ぐうきゅるる……

と大きな音が。

「ぶ」

我慢出来なかった。

この偉そうなトナカイ、本当の本当に空腹だったらしい。お腹で飼っている虫が激しく訴えてきている。

「きよ、今日だけだよ」

余りに大きな音を出すからおかしくておかしくて、笑うのを我慢出来なかった。片手で口元を押さえつつ、くるくるとフォークでスパゲティを巻き取っていく。

そして、口元に持ち上げて、ふーふー……っど。これで良いのかな？ そつと、軽く唇の端に当ててみればもう熱くない。

これならトナカイ舌でもぶーぶーいわれることはないだろう。

「はい……って、何マジマジ見てんの？」

「へ？ あ！ ああ、いや、りんりんは笑ったほうが可愛いなと思ってた」

「は、はあ？！ 何いつちゃってんの、ほ、ほら、口開けなさいよ」

だから、りんりんって……もう、そつちは良いや。

なんか赤い鼻と同じくらい赤く頬を染めてそんなことをいうから、こつちまで恥ずかしくなる。

ずいっとフォークを突きつければ、素直にはくりと口にして、もぐもぐ、ごっくん。

見たまんま。

餌付けだ。

私は今トナカイ飼ってる状態なのだろうか？

「美味しい？」

「腹減ってたからなんでも美味しい」

……可愛くないトナカイだ。

まあ、私はパスタを茹でただけなので、それでも文句ないけどね。もぐもぐと、同じ作業を淡々と繰り返しお皿の中身が半分くらいになったところで「お前も食えよ」と声が掛かった。ようすにお腹いっぱいになったのだらう。

「案外小食なんだね」

「トナカイは燃費が良いんだ」

ふーん……。

トナカイネタにはもう突っ込まない。だって私の理解の斜め上を行くし、聞いて分かるような話をしてくれるとは思えない。世の中知らないことがあるほうが良いだらう。

ぱくん。

もう冷え切ってる。

「……………あ」

私が残った分を黙々と食べていると、器用にお茶を飲んでいたトナカイの手が止まった。何？ と首を傾げれば「鈴……………」と零す。

「鈴？」

「鈴だよっ！ 鈴っ！」

意味が分からない。尚首を傾げて、もうひと口と運びかけたころで…………

ガッシャーンッ！！

うわぁ……家でイルミネーションなんて飾ったつもりはない  
んだけどなぁ。

盛大な音を立てて、窓ガラスが割れてしまった。室内灯の明かり  
にガラス片が反射して綺麗だ。

あはは……何この展開。

## 第七話

「ルドルフっ！ 何をしておる。全く、勝手に迷いおって、お主がおらねば仕事にならん」

かつんっ！

ベランダの柵に足が掛かった。

黒のピンヒールのレースアップタイプのレザーブーツだ。

うわあ……、と視線を上げていけば、次は予想通りサンタコスプレの超絶セクシー美女が立っている。右手には鞭を持ち、長い柄を左手にぱしぱしと打ちつけている姿が、決まってる。

明らかにこの人がトナカイの寝言の原因だろう。

そんな不安定な場所に立つと危ないですよ。

それから、家の玄関はあっちでそこはベランダです。

いいたいことは山ほどあるが、口に出れる雰囲気ではなかった。

「げ、サンタ……サンタ来たよ、サンタ……」

微妙にお隣でトナカイさんがガクブルっている。いきなり打たれたり大人の世界が始まったりしないよね？ 私そついうのには慣れてないんですけど……見るのも嫌なんですけど……。

そ！ そうだ、話。話とかしてれば、手を挙げている暇がないかもしれない。え、えーっと、何か。

「サ、サンタって、サンタクロース？ 白髭のおじいさんじゃない

の

「こんな話題でもなんでもなーい！

ごめんなさい、本当すみませんっ。ていうか、いやその、その格好は明らかにサンタだけど、なんというかどこかのお店のサンタさんだ。店内で超増殖している系。

「なんじゃ、娘は爺が好みか？」

あ。でも、乗っかってくれた。

とんつとベランダへと降りた美女を見れば、そこには白髭の恰幅良いサンタクロースイメージそのもののサンタさんが居た。

「え！」

「ほっほっほ、メリークリスマス！」

白髭がほわんほわんと揺れる。

私はその姿に呆然としてみると、サンタは元々あったのかなかつたのか分からない白くて長い眉に隠れていた瞳を細めた途端、再び身軽にとんつとベランダの柵に腰掛けた。

「飽きた。もう爺の格好は飽きたのじゃ」

いって、ゆるりと長く美しい足を組み妖艶に微笑む。

そして、整って美しい顔を僅かにゆがませてトナカイを睨んだ。美女は僅かな所作で全てを制する。圧巻だ。一般人の私には、何も口出しが出来ない。

「ルドルフ、早く先導せんか。お主がおらねば他のトナカイが迷うじゃろうが」

「ルドルフっ！ あんたルドルフなんて名前だったのっ？！」

自分でも、もうドコに驚いて良いのか分からないからとりあえず、細かいことに驚いてみた。

盛大な溜息を吐きつつトナカイは「ああ、面倒臭え……」と蹄で頭をごりごりとしつつ女王様の元へと歩みながら「そうだよ」と答えた。

なんだか背中に哀愁を感じるんですけど、大丈夫ですか？

別にこんなやつに愛着はないけれど、それでも、にこやかに送り出す雰囲気でないのは気の毒に感じる。

そんな私に、トナカイはベランダまで歩み出るとこちらを振り返って、ふ……と微笑んだ。

……え。

一瞬だったから見間違いかも、もう一度、ルドルフの顔を見てもルドルフは気だるそうな顔をしている。

続けて反射的に胸に手を添える。こっちも気のせいだ。もうどきどきしてない この状況にはどきどきしているけれど

「赤鼻のトナカイっていえば、昔も今もずっとこの俺、ルドルフだよ」

そこは納得しないといけないのか、知らない私が世間知らずみたいな話になってしまっている。

あまりにも女王様と、トナカイ・ルドルフが強烈過ぎて見ていなかったが、その後ろを見るとデカイそりが宙に浮いている。

引いているのはもちろん……だから、どこのお店ですか？ という感じのトナカイコススの男性だ。



私が情報整理も出来ずに混乱している間に、女王様は綺麗に整えられた指先を爪と同じ色に彩られた赤く美しい唇に添えて悩ましげに「ん〜」と唸る。

「事故とはいえ、うちのトナカイが世話になったんじゃ。特例ではあるが、何か望みをかなえてやろう」

「は？」

「本来ならば、親や大人の庇護がなければ生きていけぬ子どもにか許されぬことだが……まあ、何事にも特例というものはある。何でも良いぞ。好きな望みをいうが良い」

寛大な女王様のお言葉に、思わず色んな思考が頭の中をどどーつと流れていく。

望みつ？

そんなものを急に聞かれてなんて答えれば良いんだろう？

夢。そう、夢だよねこんなの。だったら、本当になんでも良さそうなものだけど……。

どど、どどしよ。う。

身長があと五センチ欲しい？ 胸ももう少し形が良く……ああ、こめかみの傍にある染みも消して欲しい。

はっ！ それって全部お金があれば出来るか……じゃあ、お金？ 時間？ 癒し？ 世界征服！ って私は厨二病か……なんだろう、い、一個ってどこに絞れば良いのっ！？

パニックで考えれば考えるほど、頭が真っ白になる。

はあ、と女王様の色香を含んだ溜息にぶつぶつと考え込んでいた頭を上げる。

「我は、女王ではなくサンタじゃ。それにしてもやはり大人は面倒臭いの。望みがありすぎる。一つに絞れ。何でも良い。何でも。対象者が望んだものを叶えるのが私の役割じゃ。その制限は何もない。時間もないぞ」

何一つ口にして居ないのに、人の心を読んだように、呆れた溜息を吐きそう答えた女王様……もとい、サンタクローズに「ちよちよちよ、ちよっと待ってっ！」と慌ててストップを掛ける。

## 第八話

「トナカイが欲しいといえ」

「は？」

「俺が欲しいといえ」

「は?! はあっ! 何でトナカイなんか、いや、あんたなんかいるじゃないでしょ!」

私が散々迷っている間に、トナカイが恐ろしいことを口走った。

「なんじゃ、トナカイが欲しいのか? トナカイなら、別にルドルフに拘らなくても良いぞ? 好きなものを選べば良い、」

何もいってませんっ!

私トナカイなんていりませんっ!

そう叫びたいのに、女王様は聞きやしない。

大体偉い人っていうのは人の話を聞く気がない。サンタさんはその典型的なタイプに見える。

とんつと身体を少しだけずらして私からそりが見えるようにした。

「奥から、ダッシャー、ダンサー、プランサー。ヴィクセン、ドウンダー、ブリッツェン。キューピッドにコメットじゃ、ああ、ルドルフもおるな。どれが良い?」

サンタに呼ばれる順番に、恭しくトナカイは腰を折っていく。

執事喫茶? いや、トナカイ喫茶だ。いや、需要あるとは思えないんですけど。

「他のトナカイなんて意味ない。俺にしとけ」

「いや、トナカイなんて要らないし……ていうか、あんた何が出来るのよ」

「……う、か、家事一般とか？」

なぜ疑問系なんだ。

それは出来ないんだよね。鋭意努力します程度の発言だよねっ！

それだけ押ししておきながら売りの一つもないのかこのトナカイ。気の毒すぎる……。

「う、うるさい」

むうっと可愛らしく眉を寄せて、拗ねたようにそっぽを向いてしまった。私は何もいつてないけど、がっかり感が顔に出ていたのかもしれない。

「誓いのキスまでした仲じゃないか」

なんですとっ!?!?

この赤っ鼻。何をいい出すんだ！ た、確かにキスはしたけど、されたけど、誓って何も誓ってないというか、あ、あれ？ それって誓ってるの？ いや、誓ってない。困惑。

「なんじゃ、それなら我もごねるわけにはいかんの。良いよ。りんりんにはルドルフをやるっ」

「いいませんからっ!?!」

それから、女王様までりんりんいうなっ！ 私の叫びも、心の叫

びも華麗に無視された。

「まあ、今宵は仕事があるからの、借りて行くぞ？ 終わればりんりに返そう」

返さないでください。

いません。

本当に必要ないですっ！

全力拒否の私の姿勢はどこまでも無視される。

「凜夏。良い子で待ってるよ」

こつこつとなぜか嬉しそうなルドルフに頭を小突かれた。

多分、撫でられているんだろっけど、これは確実に小突かれている。私不幸にもほどがあるだろう。泣きそうだ。

「窓……直してから出て行ってください」

駄目だ。疲れた。

こんなわけわかんない、サンタクロースご一行様にお付き合い出来ない。

そう思って口にして、顔をあげればもう目の前には誰も居なかった。窓ももちろん直っている。何事もなかったように、しんと静かになって……。

「え！」

ガラガラッ！

私は慌てて窓を開けた。

今夜の月は満ち始める直前でとても暗い。  
それでも、天上の星と、下界の星が煌き夜は明るい。ベランダの  
柵にお腹を預けてぴよんと身を乗り出し、夜空を見渡すけれど何も  
ない。

「……………夢落ち」

ぼつりと口にして、胸の中が涼しくなる。  
そうか、夢落ちか。それなら仕方ない、寂しすぎるクリスマスを一  
人で過ごす私の夢だったのかもしれない。  
まあ、そうだよなー……………あれだけド派手な音立てたのに近所の人  
もざわつきもしなかった。

「私きつと疲れてるんだ」

寒さに身を縮めて、部屋に戻る。  
ちらと視界の隅に入った食べかけのスパゲティは見ないことにし  
た。なんて、虚しい妄想に浸ってたんだろう。  
しかも、トナカイなんて馬鹿げてる。さっさとお風呂にはいつて  
ちらとそのままになっているシンクを見て 片付けて……………そ  
して、寝よう。

\*\*\*

チチチ……………。

カーテンを閉め忘れてしまった。

窓から差し込んでくる朝日に、目を覚ます。昨夜は寝付くのが早かったからこのまま二度寝が出来る感じじゃない。

なんだか今朝はやけに重い身体に嘆息し、ごしごしと目を擦る。

「……………」

もう一度擦る。

「……………」

「うるさい。今帰ったところなんだから、少し静かに……………」

「つい、いやあああっっ！！！！」

何でっ！

なんでなんでなんで！

どうして、どうやって私のベッドの中に男が居るのっ！

動揺のあまり一瞬息を呑んだが、男が声を発したところで、我に返り金切り声を上げた。同時に、手足をばたつかせてどうにか目の前の誰かを蹴り出そうとしたのに、あっさりと両手を掴まえられてしまい、足もホルルドされた。

「っひ……………」

「そんな怯えるなよ。りんりん」

「り、りんりん？」

私をそんなふざけた名前で呼ぶのは一人だ。

いや、でも、ルドルフはトナカイだった。目の前のは人間だ。角もないし、なにより、私の手を掴んでいる。蹄ではなく、五本の指で。

「間違つてないって、俺がルドルフ。神使いだから、人間みたいに嘘は吐かない」

「……で、でも」

何もいつてないのに、私の考えたことが分かるように、そういった男にへなへなと腕の力が抜ける。それにあわせて、捉えていた彼の大きな手も解け身体も解放される。

「俺はトナカイだから、昨夜の役目さえ全うすればあとは自由なんだ。それ以外のときを人間として過ごしたいと思えば人間になれるし、普通のトナカイで居て、のんびりしたければ、そのまま居ることも出来る」

「……そんな馬鹿な」

どう考えても女性の一人暮らしの部屋に忍び込んだ変質者だ。



## 第九話

私は被害者なんだからここで叩きのめしても罪にはならないと思う。でも、出来るかな？ いや、一瞬の間について警察に通報とかすればなんとか……。

「出来るわけねーだろ。体格的にもりんりんのほうが劣ってるんだ。本気で掛かって俺が伸されるわけない」  
「そう、ですね」

だから、なんで私の考えていることが駄々漏れなんだろう。  
私の疑いの目を一身に受け、自称トナカイは、深い溜息をひとつ吐いて、もぞりと動く額にかかっていた前髪をかきあげて、染み一つない綺麗な額の隅に貼られた絆創膏をぺりつと外した。

「凜夏が、蹴った石が当たったところ。ほら、同じところに傷があるだろ？」

「……」

メイク？

私は恐る恐る手を上げて、そつと、その傷に触れてみた。

「痛っ！」

「あ、ごめん」

本物だ。

「当たり前だろ……お前がサンタクロースに望んだから俺はここに居るんだ」

「……望んでないし」

願い事を決めたのはこいつだ。私じゃない。

「そう思うのは勝手だけど、星の数ほどあるりんりんの願いの一つにあつたから、サンタは叶えたんだ。というか、叶えられたんだ。本当に微塵も望んでいなかったら俺はここに居ない」

う。

そういわれると自信ない。

確かに、ちょぴつとくらいちょっぴりくらいは思ったかもしれない。思ったか？ 思ったかなあ？

「で、でもなんで人間なの？ トナカイでも問題ないみたいなこといってたじゃない」

なんとというか、今のこの状況は普通じゃないと思う。動物保護していたときとはわけが違う。

「それはりんりんが、蹄が固いつていうから……」

ほら、これなら痛くないだろ？ と続けて、つつと長い指先が私の頬を撫でる。

「柔らかいな。気持ち良い」

「っ、あ、あのねえ！」

なんだか酷く幸せそうにそんなことをいわれると、恥ずかしいっ。ふわふわと頬が熱持つのを払いたいのに、そのまま頬を包み込んでしまわれると、どんどん熱くなってくるばかりだ。

というか、本当にこいつがあのだナカイなら……年に一回しか仕事のない男だろうし、それってつまり、ひもじゃないかっ！

……私にこいつを養うだけの甲斐性があるだろうか……。

金銭的なことを考えると、やっぱり朝か夜、仕事増やそうかな……年が明けたら追加の仕事でも探さないと……。

「なあ、」

「え、あ、うん、何？」

「そんな詰まんない心配しなくて良いからさ」

ちゅっ

「っ！ なっとなっ」

「驚いて真っ赤になってる顔も可愛いな」

「なななっ」

「俺、嘔吐かないよ。吐けねーし。お前も吐けないけどな、俺に嘔……」

にやりと意地悪く笑ったルドルフは静かに瞼を落として、私にゆつくりと唇を重ねた。柔らかく食まれて腰を抱かれる。

弾くタイミングを逃してしまっただけど、でも、でも、これ以上は……だ、だっ、

「あ、あんだだっ、私のミジンコみたいな願いに振り回されるの、いいい、嫌、でしょう！」

「別に？」

トナカイは子どもが初めておもちゃを与えられたみたいに、私の身体のおちこちに触れ時折唇を寄せる。時折絡む瞳の色が、濃い緑

……トナカイのときと同じ色で綺麗だ。  
あうっ！ 見惚れている場合じゃなくて！

「べ、別について、だって、そこにあんたの意志はないじゃないっ！」  
「俺、りんりんのこと嫌いじゃない。んー……好き？ 愛してる？」

く、首を傾げながらいうことじゃないっ。いうことじゃないけど……  
ふわふわつと身体が熱を持つ。

「そん、な、わけないじゃない！」

直ぐに手を挙げるし、口は悪いし……素直に優しくなんて出来ない。それに、私まだ寝起きで何も作ってないっ、顔も髪も、そのまま……こんな可愛くない子に好意を寄せる人は居ない。

「恐がるなよ」

大丈夫だからと重ねられる。何が、大丈夫なのか分からない。

「俺、人間ってあんまり好きじゃない。人間ってさ、人の不幸を平気で願うだろう？ 自分以外の他人がどうなっても知らない。そういう部分がある……俺の知っている人間はそういうやつが多い」  
「そんなこと、そんなことないよ！」

そんなことない。そんなことないから、私はこうやって生かされている。そんな悲しいことをいわないで、いわないで欲しい。そういう言葉はとも切ない。確かに私もリア充爆発しろっ！ なんて暴言吐くけど、本当に不幸になつて欲しいわけじゃない。寧ろ永遠に爆発しろといわれ続けていれば良いと思う。

なんだか酷く悲しい気分になって瞳を伏せれば、ふわりと柔らかく頭を撫でられる。今度は本当に撫でられている感じた。ふわふわと心地良い。

「お前は良い子だな」

「は?!」

「良い子だよ。俺にも見えた、お前の望みが。お前の望みって全部小さいのな」

くつくつと笑う。

う、馬鹿にされてしまっている。だって急に聞くから、何を望んで良いかなんて分からなくて。

「全部小さくて、他人に害を及ぼさない」

「?」

「あんな目に合ったんだぞ? その男の不幸を真っ先に願っても良いだろ?」

あ。

そういわれれば、そういう手もあった。全然気が付かなかったけど……いや待て、でも、どう願えば良いんだらう?

階段の最後の一段踏み外せとか? これは相当どきどきするよ。自動販売機の前で財布あけたら一万円札しかないとか? うわあ、これ可哀想だ。

数量限定のスイーツの列に並んでいて、自分の目の前で売り切れとか。これは泣く。絶対泣かないと駄目なところだ。可哀想過ぎるっ!

「ぶっ」

「は？」

トナカイが噴出した。なんだ？ 何事だ？

「あ、はは、駄目、おかしすぎ、りんりん最高面白い。俺やっぱりスゲー好きかも！」

大笑いされながら告白されても、馬鹿にされているような気にはかならない。むすつと眉間に皺を寄せると、ぱくりと眉間を食まれてもぐもぐされる……。

「食うな」

「嫌、食べたい」

「トナカイは草食系です」

「俺今人間だから。気にしない気にしない」

気にしろよ。持ちキャラってもんがあるだろう。

そ、それになにより、その、えーっと、私はHが下手で……捨てられるような……。

「それ、相手の男が下手だっただけじゃねーの？ 大丈夫、俺上手いから」

「……………っ！！」

どこからそんな自信が来るんだっ！ その上、この男に羞恥心というものはないのかっ！

「んー、嗜虐心の方が強いかもー」

耳元に擦り寄ってそういうと、鼻先で私の髪を掻き分けて、首筋

にちゅううつと強く吸い付いた。ちりりつと走る痛みにも、痕が残ってしまっ！　と思つたものの、どういふわけかもう弾く気になれなかつた。

そんな私の諦めを悟つたのか、少し身体を浮かしたルドルフは私を真つ直ぐに見つめて頬を撫でると再び静かに降りてきた。

私はただ、迷子で手負い　私がやつた　のトナカイを拾つて  
帰つただけだつたのに。

何がどうなつたらこんな結末になってしまうんだろう。

はあ……と零しかけた溜息は、トナカイの唇によつて塞がれてしまつた。

「……………メリークリスマス、凜夏」

## 第九話（後書き）

\* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \*  
\* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \*

「ご愛読ありがとうございました。」

ちよっぴり早いクリスマスのお話、楽しんでいただければ幸いです。

こちらは蒼衣さんの主催するL・L・S企画に参加させていただくものです。企画の提案ありがとうございました。それがなければ、私はこれを手がけることはなかったでしょう。縁とは貴重なものですね。それもきつとこのクリスマスの奇跡。

どうか皆さまのもとにも素敵な奇跡が舞い降りてきますように…。

汐井サラサ拝。

\* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \*  
\* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \*



## 第一話（前書き）

メリークリスマス

皆さまいかがお過ごしですか。おはようございます。

一部から、是非のお声を頂きおまけを用意しました。りんりんのように毎日頑張っている女の子へ、ちよっぴり早いクリスマスプレゼントになれば嬉しいです。

自称良い男のトナカイと、日々精進が信条のOLの日常。ご笑納くださいませ^^

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

## 第一話

「ねえ、ルウ。荷物届いてたよ……」

届いてたというよりは投げ込まれたというほうが正解。

「あのさ。分配だかなんだかしらないけどさ……窓かち割って放り込んでくることないよね？ 毎回毎回……私今回この箱に潰されたんですけど」

「んー？ 窓はすぐ直るし問題なくね？」

「……ないと思うんだったら、片っ端から放り捨てるけど」

「分かった分かった！ 捨てんなよ。またつぶれてたら助けてやるから」

そこじゃない。

私がさっきからいつているのはそこが問題なわけじゃない。というふうにどうして気がついてくれないんだろう。さっきからトナカイ：ルドルフことルウ　ルドとかルディとかって愛称にするとなんか格好良さそうだから、ルウで十分だ。という判断で私は勝手にそう呼んでいる　は私の方を見ることなく、ミニノートパソコンと向かい合っている。

「とりあえず箱開けてみて」

私はこれから出かけるところだから忙しいのに、と、思いつつ、私の上に乗った箱の中身も気になったからとりあえず開封した。

「……こけしですが」

何でこけし？　なんでこの時期にこんなもんが放り込まれるんだ。いや、こけしの時期ってわかんないけどさ……。

つるんとした丸い頭が整然と並んでいる。

私はその一つを取り上げてまじまじと見詰めたけど、とりあえずなでなで。唯のこけしだ。開いているのか閉じているのか微妙な一重の瞳にちょこんと愛らしいおちょぼ口。

民芸品屋さんとかに並んでいるそれだと思う。

「じゃあ、そこら置いといて。どっかで大量に奉納でもされたんだろ？」

「う、うん……」

ちらりとルウを見て、まあ良いかと私も出支度を整えることにした。

年内最後の飲み会だ。

仕事納めってことになってるけど、忘年会もやったんだからそれに重ねることないのに、前のは会社ぐるみ。今回は同じ部署だけでやるらしい。なんかうちの部署やけにフレンドリーなんだよね。

年明け真剣に休みの日とか早朝出来る仕事を探さなくては、と思っていたのだけど、私は今までどおりで構わないといわれた。現在無職。ニートなトナカイに　成人男性一人飼うことになること、やっぱりそれなりにお金が掛かると思っ、頑張らねば！　と思っただのに、なぜか大爆笑されるし。

「自分の食い扶持くらい何とかする」

なんて偉そうにいつて、どうするのかと思ったら翌日から荷物が飛んできた。

一々窓ガラスを割って飛んてくる。その中身は多岐にわたる。食

べ物のときもあるし、今日みたいな意味不明な品物であることも多い。

トナカイさんのいうことには、供物の分配が行われているんだって。

神様に色々と捧げられる供物は一度集められて、それぞれ不定期に分配　それも比率があるらしいけど　される。

食べ物ときはうちで使ったりするけど量が半端ないので、近所に配ったり　お陰で両隣さんと仲良くなってしまった。これまでに顔も殆ど知らなかったのに　する。

物品のときはルウがオークションで捌さばいている。

神様の加護でもあるのかどんなくならぬ商品でも売れる。今回のこけしも多分全部綺麗はに捌けるだろう。

「ねえ、私出かけるけど、これで出て変じゃない？」

「変じゃない。可愛い可愛い」

「……見てからいいなさいよ」

髪はアップにするか降ろしておくか迷って、今日は降ろしていくことにした。

ホットカーラーで綺麗に巻きを作って整える。あまりごてごてしてないカチューシャで留めるだけにした。一応会社の、だし、控えめなほうが良いよね。という判断だ。

服もミニのブロックチェックのフレアスカートに、パフスリーカットソーの上にニットのポンチョを羽織った。綺麗にまとまったと思っただけど……あとはニーハイブーツを履いて……。

「見なくても分かる。あれだけうるうる着替えまくって決めたんだ

から、大丈夫だろ。別に何でも良いじゃん、着てくものなんて誰に見せるんだよ」

「誰に見せるとかって問題じゃないの」

「家ではフツーにスラックス上下とか平気じゃん」

「……う」

確かに玄関を境界線にがらっと違うのは認める。

認めるけど、普通そうだと私は思ってる。眉間に寄った皺を取るために深呼吸。

そして、ルウは、ぱたんっとパソコンを閉じて、べったりとコタツに突っ伏す。本当にコタツに根っこでも生えてるんじゃないの？

「生えてねえよ」

ぶすつとそう零したルウは、仕方なくという体を崩さず立ち上がって私の正面に立ち、頭の先っぽから足の先っぽまでマジマジと見詰める。何をいわれるのかとどきどきしていれば「ふわああ」と欠伸を零された。

がつっ!!!

「痛っ！ 踏むな、踏むなよっ！」

「スリッパなんだから痛くないでしょ」

思い切り踏みつけてやった。

ふんっ！ どうせ、何したってそんなに変わり映えしないわよ。それでも努力つてものがあってね。

「暴れるから、ピアスが傾いてるぞ……」

「え、本当？ どっち？」

いわれて、慌てて直そうと手を上げたらその手を掴まえられた。

「ひうっ！」

続けて、ぱくりと耳朵を食まれて、舌先がピアスの向きを直していく。突然の刺激に、かああっと身体中の熱が上がって、ぶはっと全身の汗腺から汗が噴出す気がする。

「はい、直った」

そんな私とは対照的に、ルウは平然と私の耳朵を解放して、おまけにちゅつとこめかみに口付けを落とした。わなわなと羞恥に震える手を握る。

「てててててっ！」

「て？ はあ？」

「手で直せっっていうてんのよっ！」

がながんがんっ！！ 今度は足の上で地団駄踏んでおいた。

「痛いっ！ 痛いっつて、ば、馬鹿っ！ お前、ちょ、照れ隠しに暴力振るうのやめろ、マジで痛いから」

ちよっぴりトナカイさんの目が涙目になったところでやめた。しゃがみ込んで足の甲を押さえている。ちよつとやりすぎた。大抵のことは口で出来るっつていったじゃん……とかぶつぶついつてる。

「今は五本の指がちゃんとあるんだから使いなさい！」

「……はいはい」

それで？ と恐い顔して告げれば「可愛い可愛い」とお座なりな返答がなされる。

もう良いや。これ以上ルウと遊んでいる暇はない。

「じゃあ、私行くから、出掛けるなら鍵忘れないでね」

よいしょと玄関でブーツを履きながらそういつて立ち上がると、ルウに、ほらとバッグを渡される。図的に完全にひもつぽくないか？

「帰り呼んで。迎えに行くから」

「近くだし、歩きかタクシーで……あー、うん。分かった呼ぶ、呼ぶ」

そんな捨て犬 トナカイか みたいな顔されたら何もいえな  
い。

## 第二話

\*\*\*

「……………うん。あっちの通り、そうそつイルミネーションが綺麗なところ」

『あー、光の川が出来てるところだよな』

「それ、上から見たときだよ。光は仰ぎ見るの」

部長にこっそりと挨拶をして、二次会へと向う波を回避してルウに連絡を入れる。

細かいことだけど、なるべく人としていて欲しいから、そんなところまで気になる。私はとてつもなくビビりだと思う。

『直ぐ出るけど、立ち止まってぼーっとしてんなよ』

「何それ、優しくない」

『兎に角立ち止まるなよ？ 声掛けられても基本無視な？』

「あー、はいはい」

神使いさんとやらが、人の声を無視しろとはどういう了見だろうね。笑いそうになるのを堪えて頷き、じゃあねと電話をきったところで

「あれ、園枝さん、二次会行かないの？」

声を掛けられた。

なんとなく一人でお留守番させておくには気になりすぎるから、いつもなら二次会までは付き合っただけだけど今日は抜け出したという



のに……。

振り返れば、桜崎さんだ。

私より二年くらい先に入社して、新人のときに色々お世話になった面倒見の良いお兄さんタイプ。今もきつと私を心配して抜けてきてくれたのだろうなと分かる人の良さだ。

「は、はい。ちょっと飲みすぎと食べすぎで気持ちが悪くて……」

確実にこのあとルウと何か食べるだろうから、八分目以下にしてあったものの、他に抜けるいい訳が思いつかなかった。

だって、家で飼ってるトナカイが心配で、なんていえたもんじゃない。

どのあたりで変人扱いされるか、考えただけで恐い。

「大丈夫？ 家まで送ろうか」

「い、いいいいいえ！ 大丈夫です。近いですから一人で帰れます」

こういう良い人、と分類される人の好意というのは兎角断り辛い。断っても

「気にしなくても良いよ」

とにつこりされるから。

悪気がないのは分かるんだけど……。

まあ、良いか。

ルウも声掛けられても無視しろっていったし、桜崎さんと一緒なら知らない人が声掛けてくることもないだろう。

「桜崎さんも二次会行かなくて良いんですか？」  
「うん。良いんじゃないかな？ 多分大丈夫」

それは合流したほうが良いんじゃないだろうかと思ったけど、  
いっても無駄だろう。

こういう人が意外と頑固であることも大抵決まっている。

私はルウに説明したルートでのんびりと歩き出した。

その隣りを桜崎さんも続いてくれる。街灯に映る桜崎さんの頬が  
ほんのり赤い。私もアルコールが入ってるから同じように赤いのか  
な？ そう思うと、無意識に頬を押さえた。

確かに熱い。

続けて出そうな欠伸を噛み殺し、浮かんだ涙目を擦ろうとした手  
を止めて、目頭と目尻を押さえるに留めた。擦ったりしたら、化粧  
が崩れる。

「これで仕事納めだね」

「そうですねえ、お疲れ様でした」

「うん。お互いにね」

はふうと吐く息が白いのは楽しい。寒いけど。ほわほわ綿菓子み  
たいだよ。足取りもちょっぴり軽くなる。寒い日は、どことなく  
ぴんつとするから好きだ。

「年末年始は何してるの？」

「私ですか？ 何してるかなあ、年賀状書いてないから今日から書  
いて……」

「え、今日から?! ……来年も僕のところにもくる？」

「引っ越してないですよ。だったら送らせてください。頑張って  
書きます!」

年々数が減っているので、基本手書きだ。

パソコンで作れば良いのだけど、別に大した手間じゃないし、そのー、なんというかそのほうが好印象のような気がするから。良い子の私は人からどう見られるかが最重要事項だったわけで、必然的にそうなった。

「どこか旅行とか行かないの？」

「旅行ですか？ でも私ウィンタースポーツとか出来なくて、ああ、温泉とか良いですね。のんびり露天風呂。雪とか薄っすら積もつてると素敵ですよね！」

思わず、ぐっと握りこぶしを作って力説してしまった。

しまった、こんなことを力説するのは私のキャラじゃない気がする。最近、ルウのせいで素で居る時間が長いから、自分でも自分の持ちキャラが良く分からなくなってきた。

反射的に顔を逸らしたけど、側頭部に視線が突き刺さる。

そんなに見ないでください。恥ずかしいから。

「少し、雰囲気変わったよね？」

ぼつりと聞こえてきた台詞に、ぎくりと肩を強張らせてしまった。

恐る恐る桜崎さんの方を仰ぎ見れば、目が合っただけでこりと微笑まれる。良い人だ。こういう人は基本的に良い人という枠組みで終わって、恋までが割りと遠い。

「そっでしようか？」

参ったな。

元々彼への私の印象が良かったのか悪かったのか良く分からないから、どんな顔して良いか分からないよ。

「うん。可愛い感じになった」

「え、見るに耐えなかった？！　ってことですか」

そこまでいってない。私の心の突っ込みと、桜崎さんの声が被った。反射的に苦い笑いを交わす。

「見るに耐えないなんて、とんでもない。前は清楚なお嬢様って感じだったけど？　……恋人と別れたから、変わったの、かな？」

「え？」

「あー、ごめん。部署の女の子に聞いたから……その、そういう子が好きな人で、園枝さんが合わせてたのかなって思ったから、えーっと……」

僕何いつてるんだろ。と、顔を益々赤くしてぷいと逸らすと恥ずかしそうに頭を掻いた。

背も高くてスタイルも良いのに、小動物みたいだ。って、それより誰だ。喋ったの……。一瞬で数人の顔が思い浮かんだ。

ん。

全員可能性あり。

桜崎さんって女子社員の信頼厚いもんな、聞かれたら普通に答えそつだ。私でも絶対秘密とかいわれていない限りさらっと口にしそつ。



ふわふわつと私の顔まで真っ赤になっていく。鼓動がはたはたと早くなり、思考がぐるぐる回る。え、あ、あの……声も出ないから口ばく。

そんな見詰めないでください、い、と思ったら急に両肩が重くなつた。

ずんっ!!!

肩から伸びた二本の腕の先に嵌っているバングルには見覚えがある。

「っ！ 馬鹿っ！ おま、止まるなっっていつてんだろ……はあ、はあ……しんでえ、お、まえ、可愛いから、絶対変なのに絡ま、れる、つて……ぜえはあ」

激体力値が低くて息が上がっている。

室内警備ばかりしているからだ。変質者レベルではあはあいつてるんですけど、背後の人。

一瞬にしてときめき系の熱が冷めた。

「仕方ないだろっ！ 靴が慣れないんだよ」

ぶーぶーとぼやく。

蹄でしたもんね。仕方ないよね。仕方ないかどうかは私にはわからないけどさ。

「で、何、何に絡まれてるの？ あー、あんた。これ俺のだから誘っても無駄。ほらいつていつて」

人の肩越しに、ぶらぶらと桜崎さんを指差して失礼極まりないこ

とを告げる。

桜崎さん固まってる。  
当たり前だ。

「しっ！ 失礼なこといわないのっ！！」

慌てて乗っかってきたルウを叩き落として、桜崎さんに深々と頭を下げる。

「すみません。本当にごめんなさい。ほら、あんたも謝って！」

「な、何で俺っ?!」

「なんでってあんたが最悪のタイミングで最悪のことをいってるからでしょっ！ 桜崎さんは会社の先輩なの！ 一人だったから心配して途中まで送ってくれてたの。あんたはお礼をいう立場なのっ！！」

ぐぐぐぐつとルウの頭を押さえつけて、頭だけは下げさせる。

「え、ええと、良いよ良いよ。気にしないで、あの、えーっと、俺のっついてたし恋人？」

「ペットです！」

しまつたあああつ！

ルウが得意気に頷きそうだったから、反射的に出てしまった。

ペットってなんだペットって！ そっちのほうの問題だろうっ！

え、と当然声を詰めた桜崎さんにわたわたと両手を振りつつ、違っ！ 違っっ！ といいたいの慌てすぎて言葉にならない。

「俺はペットでも良いけど」

誤解を重ねるから黙れ。

にやにやと重ねられるので、がつつと足を踏みつけておいた。ピンヒールだから痛い。私が足を退けるとともにしゃがみ込んだ。暫らく悶絶しているだろう。

「ル、ルームシェアしているだけです。はい」

まあ、シェアする部屋はないけど…… 1DKだからね。

「恋人ってというか、それ未満ってというか、自宅警備員ってというか、」

困惑している私を見ながら、ちらとだけルウを見て桜崎さんはゆるりと微笑む。

「うわ、この人、こんな顔するんだ。っていうくらい、どきりとする綺麗な笑み。」

「君が変わるきっかけをくれた大切な人なんだね？」

「へ？ …… あ、はい ……」

「 …… そっか、羨ましいな」

物凄い真摯な瞳で真っ直ぐに見詰められて、ふわりと頬が熱を持つ。いわれた声がいまいち耳に届かなかったけど、反射的にはいと答えてしまった。

私の答えに桜崎さんは僅かな間、瞑目してゆっくり深呼吸したあと「そっか」と重ねてにこりと笑った。

「じゃあ、迎えも来たみたいだし。二次会に顔出してくるよ」

「え、あ、はい」



気をつけて帰ってね。と付け加えてばんばんと私の肩を叩く。ありがとうございます。と気の抜けた声で答えるのが精一杯だった。

「はあ、腹減った」

「んっ！」

「痛え」

足が痛いとしゃがんだままだった、ルウの頭頂部には拳骨一つ。お前はそれしかいうことないのか。

「俺の方が二センチ背が高い。俺の方が良い男」

やっとこ立ち上がって、ばんばんと立ち居を正しつつ唇を尖らせる。

子ども染みた内容だ。笑いそうになるのを堪えて

「……耳出てるよ」

「えっ！ 嘘っ！…！」

「……嘘だけど」

慌てて頭頂部を押さえるルウを見てちよつと楽しむ。

吃驚する時々耳がちよこんとでる。怒ると角まで出る。一度だけレコーダーの録画が上手くいつてなかったと、レコーダー相手にマジギレしているときに出ていた。小さすぎて、気の毒で、あれは見ていて切なく涙が出そうだった。

「立ち居振る舞いは桜崎さんのほうが数段上。その上、女子社員か

らのウケも良い。ルウの方が上だななんてとてもとても」

ワザとらしくいって肩の位置に手を持ち上げて首を振る。

なっ！ と慌てているルウをほっぼって「帰ろっ」と足を進めると慌ててついてくる。

「なんか反論ないの？」

隣りに並んで歩き始めたルウを見上げて、にやりと問い掛けたのに、ルウは頭の後ろで手を組んでのんびりと足並みを揃え「ない」といきる。

なんだ、もっと食いついてくれるかと思ったのに。

「あいつがどんなヤツで、どんだけりんりんのこと好きだったとしても、りんりんは俺のことが好きだから良い」

「っ！ は、はあっ?!」

ななっ、なんて馬鹿げた恥ずかしいことをさらっといってしまうんだっ！

思わず足が止まる。声まで裏返してしまう。そのせいで数歩先に出してしまったルウは、振り返ると、得意気に口角を引き上げる。

「間違ってる？」

「……………」

間違ってる間違ってる間違ってる間違ってるーっ！

「ひでえ、そこまで脳内大合唱すんなよ。ま、いつけど。俺の方がラブりんりんってことはいーよ」

ぶすーっと頭の天辺から湯気が出そうになるくらい真っ赤になっ  
てしまう。

そんな私を益々赤くさせるようなことをルウは口走ったくせに「  
早く帰ろう。俺マジで腹減った」と締め括り踵に重心を載せてくる  
りと進行方向に向き直って歩き出した。

今度は私が追いかける番だ。

「恥ずかしくないの？」

「別に。どーせ俺、嘔吐けないし。俺はりんりんの心が読めるけど、  
りんりんは読めないから口に出してるだけ」

「……それさ、やめてくんない？ 脳内台詞で会話が成り立つのい  
い加減気持ち悪いんだけど……」

「いいじゃん。大したこと考えてないし」

……何気に失礼なんですけど、それは私あまり物事を深く考え  
ていないとか、能天気女だとかいいたいのだろうか？ ぶすっと眉  
を寄せた途端「違う違う」と笑われる。

だから、心を読むなといったばかりなのに。

## 第四話

「どっちかっていうと、りんりんは考えすぎ。頑張りすぎ、やりすぎ。美容やダイエットや、着てるもんとか、髪型とか、どこまでやれば気が済むんだよ。限度ねえだろ」

「そ、それは結果がついてこないから」

「その結果は誰が出すわけ？」

「私、だと思っけど」

「ふーん……もうその満足ゲージみたいなの狂ってんじゃねえの？」

そんなことない。

肌だつて今きちんと手入れしておかないとアラサーとかになつてきたときに、慌てることになるし、ダイエットだつて、絞れるときに絞つとかないとあとで泣きそうだし、髪型だつてもっと上手になりたいし、髪質だつてもっとこしと艶があつても良いと思う……服装だつてもっと着まわし上手になりたいし……。

脳内を巡る考えをまたも読んだのかルウが大仰に嘆息する。

「他人の目を気にしまくるくせに、もっと他人の言葉をそのまま信じるよ。自分の努力の上にあるんだからさ、自分のことくらい、ちゃんと認めてやれつて。みんな可愛いって思ってたんだろ？ さっきのヤツだつてそうだし、俺だつていつつもいつてんじやん」

「あんたのは心が籠つてない」

「は？ 関係ないだろ、俺嘘吐けないんだから」

「……う」

ふわふわつと顔が熱くなる。

本当か嘘か知らないけど、ルウは嘘が吐けないとずっといつてるし、私がルウの心を読めない代わりなのかな？ それに問い掛けた

ことにはきちんと答えてくれる、答えをくれなかったことは一応な  
いと思う。

次の言葉を出せないでいると、バッグに入っていたケータイが短  
くなった。メールだ。

『二次会無事に合流できました。』

年賀状書き頑張ってたね。楽しみにしています。

少し遠いんだけど、さつき良く当たるおみくじがある神社を教え  
てもらったんだ初詣にいかない？ ペット同伴でも気にしなくて良  
いから、考えておいてね。

おやすみなさい』

……あー、えーっと……。

もちろん、桜崎さんからだ。私が中途半端なことをいつてしまっ  
た結果こうなったんだろうなあ。隣りから私のケータイを覗き込ん  
でいたルウをちらと見上げると、目が合って片方の眉が不機嫌そう  
に上がる。

「行かない。神使いがなんで神様祀つてるとこ行くわけ？ 行かな  
いだろ。というわけでお前も行かない。これ決定。予定があるって  
いとけよ」

「予定あるの？」

「寝正月」

バキッ！

躊躇なく答えた罪は重い。一瞬だけうきうきとしてしまったじゃ  
ないか。

とりあえず、グーパンチして、家路を急いだ。初詣云々はおいと  
いても、年賀状は書かなくては。

\*\*\*

はあ、やっぱり家が一番落ち着くなーと、シャワーと着替えを済ませ、年賀状をせねばとコタツの上に一式並べてダレた。

明日からに……っていつてももう時間ないんだよね。喪中に出来ないかな。いや、もう今更無理か。

「るー……、駄目だつてば。刺し箸は良くないよ」

台の上で突つ伏した腕の間から、作るの面倒臭いからコンビニで買って帰ったおでんと格闘しているルウを眺める。

ルウはさつきも靴がどのとばやいていたけど、手もあまり上手に使えない。

必然的に箸は難易度が超高くして……面白いことになる 余談だけどボタン掛けも難易度高い。ちょこつと頑張るけど出来ないから「自分で脱げよ」と偉そうな俺様発言になる。これはいただけない

本当は箸使いなんて、食べられればどうでも良いような気がするんだけど、食事に出たときとかルウが恥ずかしい思いをしてはかわいそう という名目で四苦八苦する姿が楽しいから だからちやんと使うように促しまくる。

いきなりたまごから食べようとするから、余計に箸を立てちゃうんだと思うんだけど。

食べたいんだろうなあ。

にやにや。

物凄んごく、不機嫌そうに眉が寄っている。

私の注意を無視するか、台所に立ってフォークを取ってくるか…  
…ふふ…迷ってる迷ってる。

……ぱし。

台の上に箸が寝かせられ……ずずい、と私の方へと寄せられた。

「何？」

分かるけど……何がいいかわかるんだけどー、私は心読めませんから、是非とも口でいってください。突っ伏していた身体を起こしつつ箸とルウを順番に見た。

「文句いうんだったら、食わせれば良いだろ」

何故上からものをいうんだ。膨れっ面で。

「あーん」

「……ぷ」

小さな子どもみたいに口を開けて待つルウを見ると、お預けさせるのも可哀想だし何よりお腹がコロコロなってる。私は仕方ないという体で、器からお皿にあっさり 自分でいうのもんだけど、家がそういつのに厳しかったから箸だけは上手く使える たまごを移して割ってあげる。

「ちゃんと練習するんだよー」

あーん。と、たっぷりからしをつけて放り込んであげた。  
当然、ぐふつてなる。ぐふつて。  
がつつと口元を押さえて、ばたばたと手でコップを探すから握ら  
せてあげた。

熱いお茶ですが大丈夫ですか？

「ぶっ！」

吐くのはギリギリ留めたようだ。  
楽しい。

ルウ超楽しい。超真つ赤だ。

「……からひ、つけしゅぎ」

「ごめんごめん。ぶ、はは、ルウ涙目。あははは……しかも、しゅ  
だつて……ふふ、はは……耳も出て、るよ。あはは、自称、良い男  
が台無し、だよ」

涙でそうなくらいおかしい。

げらげらというくらいの大笑いお腹痛い。

ルドルフが来るまでは、あつたかどうかわからない。少なくとも  
今はある。

悩殺美女のサンタさんにまで感謝しそうだ。

「今度は大丈夫、はい、あーん」

目尻を押さえて本当に笑いすぎて出てしまった涙を拭い、一口大



のたまごを持ち上げる。ルウは若干警戒しつつもやっぱり口を開ける。

もう一回盛って上げようかと思ったけど、流石に可哀想だからやめてあげた。

はぐはぐしながらルウはお行儀悪く顎を台に乗つけて、にゅーんっ瞳を細める。

「はふー。ぬつくーい。うまーい。しあわせー」  
「私も食ーべよ」

折角机上に広げた年賀状を隅っこに追いやって、ぱくりと頬張る。良くお出汁が染みてて本当美味しい。ルウじゃないけど、思わず頬に手を当てて、はふっとしてしまう。

うん。確かに幸せかもしれない。

一人思い領いたら視線を感じて目を開けた。

「何？ に、にやにやしないですよ」  
「べっつにー、ほら次、だいこーん」  
「はいはい」

というか、これ、完全に餌付けだよな。  
トナカイ飼ってるよね？

ペットを飼い始めるとなかなか外出も、もちろん外泊もできなくなるって聞く。今正にその状態に落ちてしまっているんだろうか。

「うまーい。でも、凜夏が作ったほうがもっとうまーい」

う、寝正月も仕方ない、のかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0348z/>

---

\*\* トナカイひろいました \*\*

2011年12月24日09時52分発行